

ネットルーム下関駅前&キャビンホテル

[山口県下関市]



スマートロック連動で受付から退店まで全自動 無人オペで人件費削減、利用客にも好評

(株)昇興
ネットルーム下関駅前&キャビンホテル
オーナー 岡本京紋氏

コロナでテナントが撤退したビルを活用 ネットルームを兼ねた宿泊施設を開設

JR下関駅西口から徒歩3分の至近に、今年の9月にオープンした「ネットルーム下関駅前&キャビンホテル」。この地で長く営業するテナントビルの3~4階をリノベーションし、全15室を配置。ベッドとシャワールームに、パソコンまたはテレビというシンプルな構成ながら、休憩は平日1時間1,000円~、宿泊（1Dayパック）は1泊5,500円というリーズナブルな料金設定で集客を図る。

建物を所有する(株)昇興は、テナントビルやアパートなどの管理業務を主業としており、ネットルームや宿泊施設の直営は今回がはじめてとなる。代表取締役岡本博文氏の奥様で、施設オーナーの岡本京紋氏^{きょうみ}は、ことの経緯をこう話す。

「コロナ禍をきっかけにテナントが撤退したビルをどのように再活用するかを考え、駅前の好立地を活かしたネットルーム兼キャビンホテルというスタイルになりました。下関駅周辺にはネットルームやネットカフェがまったくなく、また近隣のビジネスホテルはここ数年で宿泊料金が高騰しているので、どちらの業態においても一定の需要があると考えました」。

当初はネットルームのみの営業形態を想定しており、それに適したオペレーションシステムの構築を図るなか、地元の販売店、フラットフィールド(株)を通じて東芝テック(株)と知り合い、その紹介でスターランドがシステム構築を担当することとなった。

従業員は雇わず実質オーナー1人で運営 人と接する煩わしさがなく利用客にも好評

オペレーションシステムの構築において岡本氏が強くこだわったのが、省人化システムによる無人営業の実現だった。

「人件費が高騰するなか、コストで



入店してすぐのフロントにある自動受付／精算機。3階、4階フロアのそれぞれに1台ずつ設置され、各フロアのルームの扉につけられたスマートロックと連動している



当初はネットルームのみの営業を想定していたルーム内は、必要最小限の機能を備えたコンパクトなつくり



タッチパネルでルームと料金パックを選ぶと、4桁の入室キーとバーコードが記されたレシートを発行（左）。ルーム扉の小型パネルに4桁を入力すると開錠される（右）



タッチパネルの右横にある読み取り機にレシートのバーコードをかざして、自動精算機で精算。現金、クレジットカード、QRコードなど多彩な精算方法に対応する

お客様の満足度を高めるため、入店受付からルームへの入室、退店時の料金精算まで、すべて自動でまかなえるシステムをお願いしました」。

この要望を受けてスターランドが提案したのが、スマートロック「EPIC」と自動受付／精算機を連動させた無人オペレーションシステムだ。入店時にフロントのタッチパネルで利用プランとルームを選択すると、4桁の入室キーとバーコードを記載したレシートを発行。各ルーム扉の小型パネルに4桁を入力してスマートロックを開錠し、入室できる。退店時は、フロントの自動精算機と連動するバーコードリーダーにレシートをかざすと利用料金が表示される。精算終了後、施設入り口の電子錠が開錠されて店舗の外に出ることができる。

4桁の入室キーは精算が終わるたびに自動でリセットされるので、同じキーを再び使うことはできず、悪用防止になる。スタッフ管理用の共通キーの設定も可能

で、客室清掃などでの入室に支障はない。客室の稼動状況は管理PCなどで確認でき、清掃が終わるまで部屋を売り止めにするなどの操作も可能だ。オープンからこれまで、同施設では従業員を雇うことなく、客室清掃から雑務までオーナーの岡本氏1人でまかなえているという。

「人と接する煩わしさがない点がお客様にも大変好評で、近隣のビジネスホテルとの差別化につながっています」と岡本氏。スターランドについては「アフターサービスは万全で、小さな困りごとも対応。至れり尽くせりです」と評する。

今後は事前予約システムや外部OTAを活用し、ビジネスからインバウンドまで幅広い客層を取り込みたいとしている。

「スーパースター」シリーズとは

POSシステム「スーパースター」シリーズは、(株)スターランドが企画・開発・販売。カラオケボックスのほか、複合カフェ、温浴施設、飲食店など各業界向けバージョンがラインナップされ、その導入施設から高い評価を受けている。

